

**立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)**

**大学院学生研究**

**2020年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院			現代心理学研究科	臨床心理学 専攻
<b>研究代表者</b> (2021年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年・学生番号		氏名		
	<input checked="" type="checkbox"/> 博士前期課程 2年 <input type="checkbox"/> 博士後期課程 年 (学生番号: 19UN003K )		工藤 寛也 印		
<b>指導教員</b>	所属部局・職		氏名		
	現代心理学部・教授		大石 幸二 印		
<b>自然・人文・社会の別</b>	自然	・ <b>人文</b>	・ 社会	<b>個人・共同の別</b>	<b>個人</b> ・ 共同 名
<b>研究課題</b>	ASD 児へのセルフ・ハグによる不安軽減の効果 — 注意バイアス修正を仲介する介入 —				
<b>研究組織</b> (研究代表者 ・ 共同研究者) ※2021年3月現在 のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名		
	現代心理学研究科・臨床心理学専攻・博士前期課程・2年		研究代表者: 工藤 寛也		
<b>研究期間</b>	2020 年度				
<b>研究経費</b> (1円単位)	(支出金額) 54,950 円 / (採択金額) 150,000 円				

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、研究1と2の二つの研究で構成された。研究1では、自閉スペクトラム症(ASD)児に対する注意面への今後の支援のために「図形の作成と評価による構成特徴の分析」による予備調査として位置付け、研究者が自作した図形の評価・分析を行った。その際、基準として三つのカテゴリー(①ダミー図形、②柔和図形、③活動図形)を設定した。また、各カテゴリーに影響する図形の構成特徴を分析した。研究2では、「セルフ・ハグによる不安軽減効果」の検討を目的に、11歳5か月の男子児童1名を対象に全10回(1回90秒)の介入を実施した。効果は、SCASを主として、他にSDQと研究者自作の質問紙により、量的・質的側面から測定・分析された。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 自閉スペクトラム症 } { セルフ・ハグ } { 注意バイアス修正訓練 }

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)**【研究 1】**

研究 1 では COVID-19 の感染拡大の影響により、当初の研究計画の要となる「注意バイアス修正訓練」による介入は実施不可能となった。よって、研究計画・方法を変更し、感覚過敏を持つ ASD 児に対する、今後の「注意バイアス修正訓練」による介入方略の発展を見越した予備研究としての側面を持つように位置付けた。

評価・分析対象の刺激図形の作成は研究者自身により行われた。その際、各図形の作成には、酒井・乾(2000)における、“凹凸数(図形の頂点の数)”という構成特徴が心理的複雑さを規定する最大の要因であるという視点と、山口・王・椎名(2004)で示された、図形の印象に対する心理物理的特徴には“曲線性(図形の枠が直線か曲線か)”が最も影響するという視点を、参考にして作成された。加えて、図形の多様性を保つために、幾何学図形も含むように作成した。これらの視点を踏まえた理由は、本研究が ASD を対象とするためであり、ASD の細部への注意等の特徴や、ASD 傾向の高い者は高覚醒刺激からの注意の解放が困難であり低覚醒刺激からは容易であるという観点(増田・園田, 2019)が示されているためである。よって、評価シート作成においても、山口等(2004)を参考にして、「活動性」因子を表す評価項目と「柔和性」因子を表す評価項目をピックアップ・選択した。評価対象の図形は全部で 70 種類であった。図形の評価は、子どもの発達や発達障害に精通する専門家・成人 4 名が実施した。なお、協力者全員に対して、研究に関する概要や評価方法を説明した。その際、新型コロナウイルスの感染防止のためオンライン上で実施された。評価は、各協力者の都合の良い時間帯に実施してもらった。

評価後、データから得られた各質問項目の点数を評価者・図形ごとに平均値を算出し、それを基準に各図形における質問項目の点数を高低(その質問項目の平均値よりも点数が高いか低いか)に振り分け、予め設定した各図形カテゴリの定義に基づいて、三つのカテゴリにそれぞれの図形を分類した。その結果、「活動図形」には 23 個の図形が、「柔和図形」には 32 個の図形が、「ダミー図形」には 15 個の図形が、それぞれ分類された。なお、図形評価の際には同時に“意味の有無”についても評価してもらい、「意味がある」と判断された図形の数は八つであった。そのうち、「柔和図形」であったものが五つ、「活動図形」であったものが三つであった。特に、一つの図形を除くと、残り全ての意味のある図形は“幾何学図形(複雑な形をした図形)”であった。

次に、カテゴリ分類された各図形について、その構成特徴を各カテゴリと関連させて分析・確認した。一つ目に“凹凸数”に関して分析を実施したところ、本研究の刺激図形は 1 番から 70 番になるにつれて凹凸数も増加していくように設定しているため、本研究においては“凹凸数”が図形カテゴリにおける分類に影響していることは確認されなかった。すなわち、各カテゴリにおける図形番号は多様に分散されており、特定の図形番号の範囲(“凹凸数”を表している数の範囲)が特定のカテゴリに偏っているなどの傾向はみられなかった。いっぽう、図形の“曲線性”について、「活動図形」では直線的な枠線で描かれている図形が多数分類されている傾向がみられた。割合としては、全 23 個中 12 個の割合であり、「活動図形」の内 52%を占めていた。そして「柔和図形」では曲線的な枠線で描かれている図形の分類が多数確認できた。その割合は、全 32 個中 11 個の割合で、「柔和図形」の内 34%を占めていた。「ダミー図形」についても同じく曲線的な枠線で描かれている図形が多数であった。その割合は、全 15 個中 10 個の割合で、67%を占めていた。いっぽうで、曲線的な枠線で描かれている図形が「活動図形」に分類されている場合は 23 個中 1 個の割合であり 4%を、直線的な枠線で描かれている図形が「柔和図形」に分類されている場合は全 32 個中 7 個の割合であり 22%を、それぞれ占めていた。加えて、直線的な枠線で描かれている図形が「ダミー図形」に分類されている場合は全 15 個中 2 個の割合であり 13%を占めていた。すなわち、特に「柔和性」因子の項目と“曲線性”という構成特徴との間での関連性は弱いことがうかがえたことから、“曲線性”による構成特徴が必ずしも各カテゴリに影響しているとは言えなかった。

次に、各図形の類似性について、各評価者の間での共通の組み合わせと構成特徴を関連させて分析を実施した。その結果、類似していると評価される組み合わせの多くは“凹凸数”も類似している場合が多く、加えて“曲線性”に関しても共通しているものが類似する傾向がみられた。よって、図形の類似性に関しては、“凹凸数”および“曲線性”の両構成特徴が影響していた。

なお、今回実施した図形の評価から今後の支援法に関して、例えば、「活動図形」や「柔和図形」を基準にターゲット刺激を決定・構成すること、“凹凸数”に関して提示の工夫を凝らすこと、提示する単純図形と幾何学図形の比較、提示する図形の大きさや配置を考慮した工夫、三つのカテゴリの提示する際の組み合わせ方、実施上の手続きや言語反応などの質的な側面からの分析、に関して応用可能性が考えられた。

**研究成果の概要 (つづき)****【研究 2】**

COVID-19 の感染拡大の影響により、当初の研究計画を微調整した。具体的には、「セルフ・ハグ」という感覚調整方略を対象児に実施してもらい、対象児の抱える不安が軽減されるという仮説を立て、研究を計画した。「セルフ・ハグ」は、“胸の前で両腕を交差し、肩部位を軽く掴みながら目をつむり静かに下を向く姿勢”で内的状態を意識するように心がける方法であり、内的信号の検出力が高まって外的な刺激への注意が抑制される、内的信号と外的刺激のトレードオフのメカニズムが働くと考えた。また、本研究の対象児は、児童精神科や小児神経科への受診歴および医学的な診断を受けていないものの、就学前から発達の偏りや行動調整の困難を主訴とし、就学後も友だちとのコミュニケーションの課題や行動の調整、対人関係の困難が継続し、自閉的な特性(広義自閉症表現型: BAP)を疑われており、発達支援の必要性が検討された 11 歳 5 か月の男子児童であった。介入は対象児の自宅で保護者同伴のもと、1 回 90 秒を全 10 回の計画で実施してもらった。

まず、介入前(Pre)の対象児へのアセスメントで、感覚特徴(感覚プロファイル: SP)、自閉特性(自閉スペクトラム指数: AQ)、不安(スペンス児童用不安尺度: SCAS)、情緒・行動面の困難さ(子どもの強さと困難さアンケート: SDQ)を測定した。特に SP による感覚特徴としては、①感覚探求の側面が一番高く現れていること、②感覚過敏も平均よりも高い数値が現れていること、が示された。すなわち、本対象児の感覚特性として、「自ら感覚をつくり出す、探すなどの行動がみられ、活発な側面や落ち着きがなく興奮しやすい傾向や、周囲の変化にも敏感に気づく様子もあり、注意が散漫になってしまうこともある」ということが推測された。

そして、AQ による自閉特性を測定したところ、各下位尺度では「社会的スキル」が 2 点(カットオフ値 5 点)、「注意の切り替え」が 3 点(カットオフ値 5 点)、「コミュニケーション」が 2 点(カットオフ値 5 点)、「想像力」が 0 点(カットオフ値 5 点)、でカットオフ値を下回っており、総合得点も 11 点と低く、定型発達にみられる平均点に近い点数であった。このことから、「弱い自閉スペクトラム傾向」であると認められた。いっぽうで、下位尺度の中で「細部への関心」に関しては 4 点を示し、自閉性障害群における平均には達していないものの、統制群の平均よりも高い数値であった。

また、「セルフ・ハグ」の主な効果指標として測定された SCAS について、各下位尺度は①分離不安障害、②全般不安障害、③社交不安障害、④外傷恐怖(限局性恐怖症)、⑤パニック発作と広場恐怖、⑥強迫性障害、の 6 尺度であったが、介入前の Pre 測定の結果は、④外傷恐怖、および⑥強迫性障害、でわずか各 1 点の合計 2 点であった。これらの結果を踏まえて各尺度の平均点と比較すると、合計得点および全下位尺度得点で平均を下回っていた。さらに介入終了後の Post 測定の結果においても変化がなく、得点は全て同数であった。

情緒・行動面の困難さについては、対象児本人と保護者による観点から SDQ により測定をした。まず、対象児本人の評価に関する Pre 測定において、各下位尺度における得点は「情緒の問題」が 2 点、「行為の問題」が 2 点、「多動/不注意」が 5 点、「仲間関係の問題」が 3 点であり、合計の得点である「統合的困難さ」は計 12 点であった。また、対象児の強みを示す「向社会的な行動」は 4 点であった。そして Post 測定においても、対象児本人の評価には変化がみられず、得点は全て同数であった。いっぽうで、親評価に関する Pre 測定においては、各下位尺度における得点は「情緒の問題」が 0 点、「行為の問題」が 3 点、「多動/不注意」が 10 点、「仲間関係の問題」が 4 点、合計の得点である「統合的困難さ」は計 17 点であり、「向社会的な行動」は 3 点であった。さらに Post 測定では、「情緒の問題」が 2 点、「行為の問題」が 2 点、「多動/不注意」が 8 点、「仲間関係の問題」が 3 点、合計の得点である「統合的困難さ」は計 15 点であり、「向社会的な行動」は 6 点であった。すなわち、「情緒の問題」で 2 点の増加がみられたが、「行為の問題」では 1 点、「多動/不注意」では 2 点、「仲間関係の問題」では 1 点、合計得点である「統合的困難さ」では 2 点の減少がみられた。「向社会的な行動」においては 3 点の増加が示され、保護者の視点では総合的に対象児の情緒・行動面の困難さが減少されたことが示された。

研究 2 では、「セルフ・ハグによる不安軽減効果」の検討を目的とした。結論として、SCAS による不安軽減の効果がみられなかったことから、仮説は支持されなかった。しかし、保護者による SDQ の結果から、情緒・行動面の困難さには効果的である可能性が示唆された。その上で、本研究の課題として、対象とした児童の基準や人数など「対象児の選定」の問題、そして用いた尺度や測定者などの「効果測定の方法」の問題についての修正が挙げられた。これらの理由から、感覚面の調整が注意バイアスのあり方を変化させるかということに関しては、本研究だけで問うことはできず、さらなる調査や介入を行う必要がある。

※この(様式 2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

**研究発表** (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

**④【学会発表】**

- ・ 工藤寛也・大石幸二 (2020) 自閉スペクトラム症児へのセルフ・ハグによる不安軽減の効果－注意バイアス修正を仲介するモデルの構築に向けた研究枠組みの整理－ 日本特殊教育学会第 58 回大会 (ポスター発表番号 : P8-18), 発表日 : 2020 年 9 月 19 日 .

※ 論文投稿予定・・・2021 年度中に論文投稿や学会発表の申し込みを行い、修了後に成果のアウトプットを予定している (投稿予定先 : 立教大学臨床心理学研究)。